

学校協議会からのメッセージと記録

座談会

青少年を育てる地域社会とは？

—閉課程にあたっての学校協議会からのメッセージ—

学校協議会委員 = 山本冬彦（座長）、藤原修身、
福田年宏、北口 真、木下真知子
学校長 = 西島多枝子



学校協議会からの発信

山本委員 本日はご参集下さいましてありがとうございます。本日は学校協議会として提言をまとめるための意見交換を行います。閉課程にあたり記念誌を発行するという事で、学校協議会の記録や提言を載せようと進めています。当初から、この学校協議会は閉課程に向けてなにか地域に発信するような事をやって閉じようかと話していました。その成果の1つとして、平成18年3月6日発行の『学校協議会だより』を出しました。これを踏まえて、定時制はなくなるのだけれども、地域の中で我々がしなければならない事、地域にはこの様なものが必要であるという事を議論して収録できればと思っています。

これまでの議論のなかで、「吹田高校の定時制課程がなくなっても、定時制が設立された考え方を引き継ぎ、地域に対して青少年の問題に取り組むことのできる拠点やその取り組みを方向づけることのできるようなアイデアを示したらどうか」という問題提起をしてみました。委員の皆様のご意見をお願いします。

子どもたちの意見を聞く

福田委員 昔から子どものために何かをやろうとして、結局、大人は箱物を作ってしまった。子どもの拠点の問題について、話はいろいろとなされてきたが、結局は行政が主体になっていて、地域の子どもたちが一緒にやっていくという最初の線からずれています。具体的にいうと、NPOでも立ち上げてもらったらよい。たいていの場合、行政が運営していくと従来の箱物になってしまうという危惧があります。だから、限られている人だけで作っていくのではなく、地域の人たちの意見を取り入れるべきです。「誰のために、何をするために」という事を考えて、地域の子どもたちのためにという考えがあれば、もっと地域の人たちの意見を聞くべきだと思います。そして、どんな意見を言うべきですね。

山本委員 もうちょっと突っ込んで、いろんな課題を掘り出すという事が必要だと思います。

福田委員 つくってやるのではなく、「どういうものがあたらしい」「どのような形がいい」という子どもたちの意見を聞くべきです。もう大人たちだけがやる時代ではない。

藤原委員 福田さんの意見を聞いて、拠点整備をするにあたって「当事者の意見がどれだけ取り入れられるのか。」「大人だけの見方でいいのだろうか。」と思います。今、拠点整備をするのであれば、公民館やメイシアターなどの今までの施設が地域教育の先導に立つ取り組みをやっていたのかという「問題」があるので、そこをよく点検して、きちっとした意見を出して、それを組み上げてほしい。

山本委員 極端に言えば、地域社会のなかで大人1人が、子ども1人2人と付き合って、子どもがいろんな家を自由に入出入りするの理想じゃないかと思います。その中で、いろんな事を集約して、いろんな事ができるようになる。しかし、最近では逆ではないでしょうか。イベント主義になっており、子どもたちはただ集まって、喜んでおしまい。それでは子どもたちの問題も見えないし、悩み等もフォローできないのではないのでしょうか。

子どもにまかせるということ

藤原委員 子どもは孤独です。人との交わりがうまくできない子は、家族の中でも孤独です。何か問題を起こしても、「父さんと母さんには黙って！」といいます。「話した方が気が楽になれるよ。」と言っても、そこが分かっていない。自分は孤独やから寂しいと思っていても、お父さんお母さんとは一番大事な部分が結びつかないという子が多い。定時制の子どもたちは半分働いていて、自分の価値をある程度わかっていると思います。だから、大人の方が変わらないといけないと思います。

福田委員 昔から、子どもの問題について真剣に考える事はあるのだけれども、結局は「面倒見てやる」とか「与える」というふうになっています。そうではなくて、やる側の一員であるという立場にしてあげること。そうなる、家庭の中においても一般社会においても、私は、僕は家族の一員であるという自覚や責任を持たせる事ができる。このような役割分担や人としての関わりといったものが、一般社会においても欠けていると思います。特に、豊かな時代には子どもをお客様扱いにして、いろんな行事をやっているから、何から何まで大人が全部し、子どもに与えて、大人がよかったよかったと喜んでいきます。結局、子どもはそういう事をしてもらってる時は嬉しいのかもしれませんが、それでは本当の自分の存在感が分からないし、誇りや責任といったものが出来来ないでしょう。要するに、それでは子どもの居場所になっていないわけで、もうそろそろ、そういう「してあげる」ではなく、「やらせる」という立場側に子どもを踏み入れさせてみるべきでしょう。自分の場合ならどのようにしたいのか、自分でやらせて、やらせた事に責任を持たせるという思い切った事を大人がやっていかないとダメです。ずっと大人がしてあげているのでは、本当の意味の自立の力は育たない。あるいは、自分を大切にすることや自分の意見を主張する事も育たないし、自分で決めて、自分で行動して、やった事に責任をとるという力も育たない。強いて言えば、他の人を大切にするという力も育たないですね。

大人はお金という目に見えるものを優先し、一番大切な心や、自分を大切にすることや、子育てや、教育などを脇に置いて、一生懸命がんばって富を得たのは事実です。しかし、もうこれ以上そういう豊かさではなく、本当の意味の豊かさにそろそろ転換を図っていくべきだと思います。大人の豊かさの追求が間違ってたツケがきている。そろそろ切り替えないと。

子どもの育ちには地域社会も責任がある

山本委員 私が初めて福田さんと会った時に、昔はどんぶり一杯のおかずしかなかったが、それを家族全員が揃う食事の時に、子どもが自分だけ先におかずにお箸を出そうとすると、「自分だけ先に食べてはいけない」と大人からびしっと叱られ、子どももそれを受け入れることができた、そういう中で子どもたちは育ってきたという話をお聞きしました。私の子どもの場合でも、親が2人とも寝込んでいると家の事をするが、逆に親がやってくれるなあというスキがあると動かない。その辺の所を子どもたちにうまく伝えていけたらいいなあと思います。

藤原委員 とにかく働けというふうには、昔は人権など一切なかった。お金を儲けるために働き、そして結婚し、子どもができました。確かに働いたから、自動車もテレビも買えるようになった。じゃあ、それがダメだったのかというと、私はそうは思わない。地域のその世代の子どもたちもすぐ親に感謝したり、自立してやっているという意味では、私たちがやってきた事をしっかり見て育ててくれています。大した教育はできなかったかもしれないけれど、しかし立派に育ってくれた。それを見たら孤独ではなく周りに友達がいる、そして家庭の中だけではなく、